

コネか学歴か

——映画『桃李劫』に見る一九三〇年代上海の就職活動——

高橋 俊

一九二九年一〇月二四日、ニューヨークの証券取引所において、株価が大暴落する。いわゆる世界大恐慌の発生である。

アメリカに端を発した世界大恐慌は、一九三〇年代前半の世界を、経済のみならず、政治や社会情勢においても不安定なものにした。たとえば日本も、いわゆる「昭和恐慌」へと突入するが、当時の高橋是清蔵相のインフレ政策により世界に先駆けていち早く恐慌を脱する。しかし日本の円安による輸出拡大に対し米英仏などがブロック経済を押し進め、その対抗策として、日本の大陸進出が加速し、やがては無謀な戦争へと突き進んでいく……というのは、世界史や経済史の教科書でおなじみの流れである。いっぽうで、恐慌により大きな影響を受けたのは若者たちである。当時、大学への進学率は徐々に高まりを見せるも、不景気により就職先はなく、「大学は出たけれど……」という状況であっ

た。

中国に対しても、世界恐慌は大きな影響を与えた。南京国民政府が一九二八年に成立し、新しい国家システムの構築に向けて進み始めたばかりの中国は、当時、世界でもほとんど唯一の、銀本位制を採用する国家であった。そのことにより、当初は、世界中が苦しんでいたデフレ（物価下落）には陥らずにすんだ。しかし、欧米や日本をはじめ各国が次々に金本位制を離脱し、景気拡大政策を採るにつれ、中国国外への現銀の流出が始まり、中国経済は不安定さを増し、やがて深刻な不況に陥っていく。そして、一九三一年の満州事変、三二年の第一次上海事変と、立て続けに日本の侵略を受け、経済的に大きなダメージを受けることになった。

本稿では、映画『桃李劫』から、当時の若者たちの就職活動の現状を検討する。『桃李劫』は応雲衛監督、脚本は

主演も勤めた袁牧之³。中国がまさに深刻な不況に突入していた一九三四年公開の映画である。

この映画は、サラリーマンとして前途洋々たる未来が待っていると思われた青年が、没落し、犯罪者となって死刑となるまでを描いた「悲劇」である。そしてこれまで、「社会の矛盾」を描いたものとして、おもに左翼側から評価されてきた。しかしこの映画では、「矛盾」の自身が、じつは自明ではない。一般の左翼映画・左翼文学のように、「何が誰が悪いのか」（その「犯人」は、往々にして「資本家」であるわけだが）という問いが立てにくい。つまり、主人公はなぜ「没落」してしまったのが、明白な形では描かれていないのである。そこには、中国社会特有の、ある要素が付け加わっている。順を追って見ていこう。

映画は、建業工芸学校の劉校長が夕刊を手にするところから始まる。この学校は上海にあり、校長はビシッと決めたスーツを着、「二十四史」一セットが鎮座する広々とした校長室で執務している【図一】。ここでの校長、そして（「二十四史」に象徴される）学校の描写は、「学歴」、そしてそれを人間の価値判断の基準に置く一つの世界を、表現しているといえよう。仕事の手を休めて夕刊を手にとった劉校長は、ある記事に目をとめる。それは、同校の卒業生・陶建平の刑が今日執行される、という記事であった。

驚いた劉校長は、陶が収容されている監獄の科長と知り合っていたことを思い出し、彼に電話し、陶への面会を依頼する。監獄で面会を果たした劉校長に、学生時代の見る影もなくやつれた陶は、自分がなぜこうなったのか、そのいきさつを語り始める【図二】。

まず、建業工芸学校はいかなるものとして設定されているのか。工芸学校は今の中国では美術系の専門学校につけられる名称であり、インターネットで「工芸学校」を検索すると、「工芸美術学校」という名称のものが多数ヒットする。映画では、実際の授業のシーンなどはまったく出ないの、陶がこの学校ではたして何を学んでいたのかは不明である。が、後のシーンを見ると、ここでは「製造管理」を学んだ、と考えるのが妥当であろう。日本では専門学校という「手に職」的なイメージが強いが（現在の中国でも同様）、大学などの高等教育機関が未発達であった当時の中国にあつては、専門学校も高等教育機関の枠組みに編入されており、学歴を誇示しうるものであった。

その建業工芸学校の卒業式で、陶建平は総代を務めるほどに優秀な学生である。「国家の大事にあつて、希望に燃えて働こう！」と、卒業生代表としてスピーチを行う【図三】。卒業後、彼は同級生でフィアンセの黎麗琳と結婚し、希望に満ちた新生活をスタートさせる。

彼の学校生活は、つねに「理想的」なものとして登場し、



图一



图二

危機に陥った時、彼が振り返り、懐かしむのはいつも学生時代である。陶たちが卒業後、劉校長は外国留学へと旅立つ。見送りに集った卒業生たちの姿は、まさに新しい世界を体現しているかのように、若々しいものとして描かれている。

さて、陶が就職したのは、船舶会社。彼が学んだと思われる「製造管理」とはだいぶ分野が違う気もするが、一般事務として入社した、ということであろうか。妻の黎麗琳は専業主婦となる。陶がこの会社に就職した経緯、すなわち就職活動の様子は映画ではまったく描かれておらず、まるで卒業時にはこの会社への就職が約束されていたかのようである。新居も見ると豪華な高級アパートであり、調度品も整っていて、給与もかなりの水準であったことが分かる【図四】。夫婦はまさに、都市中間層4としての生活をスタートさせたのである。

しかし、陶は会社の不正（船に規定の重さ以上の荷物を積み込もうとしていた）に目をつぶることができず、経理⁵に意見し、啖呵を切って辞職する。黎は夫の辞職に対して「こんないい仕事があるかしら…」と不満を口にする。陶は「私はまだ若い、きつと克服できる」と、妻を一喝する。

陶は改めて職探しを始める。ここでの就職活動は、おもにツテや口コミを頼つての、飛び込みのようである。が、

「さつき決まったところだ」「すでに職員は埋まっている」と断られ続ける。「もし、欠員が出たら、連絡する」という約束を取り付けるのがせいぜいである。

個人によるこうした職探しのスタイルは、中国においては新しいものといえる。中国の都市では伝統的に、各地方の同郷者からなる同郷組織がそのまま職業団体となっていることが一般的であった。そもそも伝統中国では、地縁・血縁等のネットワークを重視しており、仕事の面では、そうした「コネ」あるいは「関係(クワンシ)」を使って物事を進めていくことがごく普通である。日本では否定的に語られることが多い「コネ」も、中国では積極的に評価され、「コネのある人」が「優秀な人」と同義で使われることも多い。中国の「*guanxi* 社会」についてはこれまで多くの研究があるが⁶、そうした社会形態が現在まで連続と続いている一方で、近代に入り、「個人の能力」によって仕事を見つけ、進めていく、新しいスタイルも登場した。この場合の「個人の能力」とは、すなわち「学力・学歴」である⁷。この二つのスタイルが並立し始めたのが、一九三〇年代における上海を中心とした大都市であったのである⁸。

さて、単身職探しを始めた陶建平だが、一社目の船舶会社へのスムーズな就職とはうって変わって、職はまったく見つからない。無収入では今の生活水準を維持することも



图三



图四

できないため、グレードの落ちる住居へ引越すことになる。

引越しの最中、たまたま新聞を読んでいた陶は、とある洋行の募集広告を見つけた【図五】。さっそく会社に出向くも、そこには同じく募集広告を見たと思われる群衆が山のように押し掛けている【図六】。

しかし陶は、その大群の中から一人だけ事務室に呼ばれる。これは、履歴書に記されていたであろう、職歴と「工芸の知識」が決め手となったものである。ここでは、「学歴」がものをいっただのである。採用担当者が「君の経歴はわれわれの要求にピッタリだ」とまで言ってくれ、もう少しで採用、というところだったが、その時、別の社員が入ってきて、「この募集については、もう紹介があった。もう面接はやらなくていい」と告げる。彼の「学歴」が、「コネ」に負けた瞬間であった。

さらに、不動産会社への就職活動の結果、採用の知らせが届くが、なんとそこには、「保証金として五千元が必要である」と書かれてあった。陶は、「ペテンだ、詐欺だ！」と罵りつつ、手紙を破り捨てる。

このあたりから、陶建平は精神的に追いつめられていく【図七】。無精ひげを生やし、目も落ちくぼみ、「もうやれることは全部やった：他にどんな方法があるというんだ」と嘆く夫を、黎麗琳は「私が働きに出る」と励ます。

黎麗琳は貿易会社に面接に行き、見事採用となる。しかし、その知らせを聞いた陶建平は、浮かない顔で「男が女房に養ってもらうなんて：」と不満を口にする。しかし、じつは陶も、工芸学校の同級生・黄志宏が経営する設計事務所への就職の知らせを受け取っていた。この就職が「学歴」によるものなのか「コネ」によるものなのか、この認識の違いが、この先重大な問題を引き起こすことになるのだが、ひとまず、同時に就職が決まり、夫婦に幸せが訪れたかに見えた。

しかし、黄が「おから工事」を行おうとしているのを見て、陶は見逃すことができず、「それはいけないことだ」と責める。黄は「ここはもう学校じゃないんだ」「オレは社長、お前は社員だ」と脅すも、陶は怯まない。黄が「お前はこうしてここに居られると思っっているんだ」と脅すと、陶は「自分の『資格』でここにいるんだ」と答える。しかし黄は、「へっ、なにが『資格』だ」と陶を嘲る。結局陶は、またはや会社を飛び出し、無職となってしまう。

このシーンにおいて、陶は自分の「学歴」によつて、それにふさわしい仕事を得た、と考えているのに対し、黄にとつて陶はあくまでコネ入社、しかも自分の威光があつてこそそのものと考えており、認識の衝突が見られる。

さらに、このシーンにおいては、明らかに「学歴」と「コネ」が対照的なものとして描かれている。陶はあくまで、



图五



图六

自分がこの会社に入社したその「資格（＝学歴）」に固執し、ゆえにコネなどは存在しない（ゆえに自分が黄にへつらう必要などない）、と考えているのに対し、黄は「もうここは学校じゃないんだ」「へつ、なにが「資格」だ」と陶の「資格」を否定し、お前は俺のコネで入社したのだ、ということをつからせようとしている。ここで「学歴」と「コネ」は、まったく別のトラックとして設定されている。そしてこの映画は、どちらの論理が正しいかを明示してはいない。恩着せがましい黄の態度も褒められたものではないが（それ以前に「おから工事」が悪いのは明白であるが）、陶の学歴へのプライドも、見る者をイライラさせる（し、映画自体も陶のそうした態度を幾分滑稽なものとして、誇張して描いている）。ここでは、就職に際して「何で評価されるのか」「何で評価するべきなのか」という、根本的な問題が浮上しているのである¹⁰。

さて、失業した夫のために、黎麗琳は必死で働き、陶も「主夫」として家事を行い、家庭を守る。やがて黎麗琳の妊娠が告げられ、ささやかながらも幸せを掴んだかに見える。しかし、今度は黎麗琳が、社長の馬と不倫をしているとの噂を立てられ、精神的に追いつめられていく。しかも、馬が黎を狙っていたのは事実だった。黎は取引先の接待だと騙されてホテルにつれてこられ、馬に襲われそうになつたが、間一髪、難を逃れる。しかし、その事実を知った陶

は自暴自棄になり、「どうせ俺は仕事もない役立たずだ！」と、怒りを黎に向け、殴ったあとで、「俺が悪かった」と涙ながらに謝る（ここでの陶の行動は、完全に「DV男」のそれである）。

ふたたび夫婦揃って失業中の身となった二人は、さらに条件の悪い雑居アパートに引っ越すことになる。妻は新居に夫の卒業証書を額に入れて飾ろうとするが、陶は突然、額縁を奪い取り、投げ捨てる。止めようとする黎麗琳に対し、陶は「何年もかかってこいつを手に入れたが、今ではなんの役に立つというんだ！」と、証書をビリビリに破り捨てる【図八】。

この場面は、「学歴」の敗北の象徴的なシーンである。この瞬間、彼の学歴に対するプライドは、卒業証書同様、粉々に崩れ去る。ここから、彼は「学歴」のトラックから離脱し、しかしすでにコネにも頼れず（おそらくコネを使えば果たしていたため）、「自分の力」で生きて行かねばならなくなるのである。

結局、彼はまさに「自分の力」を生かして、鉄工所で肉体労働を行うことになる。仕事があるなら肉体労働でも何でもいいのではないか。日本の感覚ではそう思えるのだが、中国においては、「肉体」を使う労働は、明らかに、一段下に見られる。「劳心者治人、劳力者治於人（心を勞する者は人を治め、力を勞する者は人に治められる）」（『孟子』）



图七



图八

ということばに象徴的なように、「頭脳労働」と「肉体労働」のあいだには、超えられない壁が設けられているのである¹¹。

陶が現場で働いている時の表情は、まさに苦行ということばがピッタリで、鬼気迫るものがある【図九】。彼の表情には、一度は「人を治める」立場に身を置きながら、その後「人に治められる」立場に叩き落とされた人間の、計り知れない絶望が表れている。

いっぽう、黎麗琳は無事男の子を出産したものの、産後の肥立ちが悪く、階下から水を運ぶ途中で階段から転がり落ち、昏倒する。危険な状態にあるものの、医者に見せる金もなく、陶は工場で給料の前借りを申し出るも、職員に高圧的な態度で拒否される。しかし、職員が席を離れたときに、金を盗み出す。その金で医者を呼び、菓を買うが、医者からは「もう手遅れだ」と冷たく突き放される。病床の妻に、陶は「医者は、すぐに良くなるといっていたよ」「産まれてくる子どものために、もっと頑張らねば、といったじゃないか」と語りかける。そして、「産まれた子には、しっかりとした教育を与えよう」「成長したら、僕らの母校にやろう、校長もきつと、僕らみたいに可愛がってくれるよ」というのだが、これは、学歴を有する彼らの現状を考えると、皮肉にしか聞こえない¹²。彼が、この状況に至ってもなお、「学歴」の呪縛から脱出できていないこ

とがわかる。

黎麗琳は夫に手を取られながら息を引き取る【図十】。乳飲み子を抱えて途方に暮れた陶は、赤ん坊を孤児院の前に置き去りにする。家へ戻ると、そこには捕り手が待ち伏せていた。激しい格闘の末、取り押さえられる。

シーンは冒頭に戻って、死刑執行のため獄中から連行される間際、陶は「劉校長、私はあなたを失望させてしまいました」と言い残す。文字通り「最期」まで、彼が寄つたつ基準として、彼の行動（の是非）を規定するのは、「学校システム」だったのである。

以上、『桃李劫』における、「コネ」と「学歴」の相克を見てきた。

冒頭に挙げた問題をもう一度繰り返すと、この映画においては、「社会の矛盾」がわかりやすい形では描かれていない。主人公の没落は、彼自身（の学歴意識）が悪いのか、それとも社会（こちらは、「蔓延するコネ制度」と「学校・学歴システム」の二種類が考えられる）が悪いのか、最後まで不明である。映画の最後のシーンでの劉校長のなんとも言い難い表情、悲しみとも絶望とも怒りともとれる（そしてそのどれもが微妙に当てはまらない）表情が、この「わかりにくさ」を体現しているともいえる【図十一】。陶建平の没落は、社会が全面的に悪いのか。学歴を嵩にか



图九



图十

て不遜な振る舞いをした陶個人の責任なのか。では、その学歴を付与した学校には、一切の責任はないのか。このあたりの苦渋が、彼の表情から読みとれる。

さて、前述のように、コネに拭いがたいマイナスイメージがつきまとう日本¹³に比べ、中国では「コネは悪い」どころか、「人脈が広い」として、むしろ誇るべきことである。中国では、就職のみならず、仕事にあたって、コネがなければ何一つ進まない、とは、中国ビジネス本のほとんどが説くところでもある。

しかし、近年の調査では、大卒であっても、上位校卒業生ほど、大学の求人票や就職サイトなど、コネに頼らない就職を行い、下位校卒業者がむしろコネを利用しているという結果が出ている¹⁴。また、近年の公務員試験において、コネを利用した「不正」は、ネット上でつねに大きな反響を巻き起こす¹⁵。これからの中国社会において、「コネ」と「学歴」の様相はどのように変わっていくのか。今後も注目していきたい。



図十一

注

- 1 小津安二郎『大学は出たけれど』は一九二九年公開。
- 2 城山智子『大恐慌下の中国——市場・国家・世界経済』(名古屋大学出版会、二〇一一)。
- 3 なお、袁牧之にはいわゆる「サラリーマン経験」がないため、物語には、洋行に十六歳から学徒として勤めはじめ、約一年の勤務経験がある応雲衛の経験が生かされていると考えられる。
- 4 民国期上海の都市中間層については、岩間一弘『上海近代のホワイトカラー——揺れる新中間層の形成』(研文出版、二〇一一)を参照。
- 5 中国において「経理」は支配人・マネージャーを指す。
- 6 首藤明和『中国の人治社会——もうひとつの文明として』(日本経済評論社、二〇〇三)など。中国社会の特質を論じた最新の成果としては、與那覇潤『中国化する日本——日中「文明の衝突」一千年史』(文藝春秋、二〇一一)がある。中国の「コネ社会」がいかなる要因で成立したのか、という問題については、おおむね「(政治的・環境的に)厳しい生活環境により、人的ネットワークを張り巡らすことで、リスク分散を図るため」と説明される。
- 7 ここでの「学力・学歴」には、専門学校や職業学校での、いわゆる「手に職を付ける」「技術系」のものも含む。これらの学校でも、技能はおもに、「専門・職業」学校を卒業した」ということで測られるからである。
- 8 もっとも、いうまでもなく、伝統中国には「科挙」という、

「学力による就職」の本来ともいえる制度が存在した。科挙は、基本的に男子であればほとんど誰もが受験することができ、地縁や血縁を意図的に排除した官僚登用システムである。科挙の中国「関係社会」における位置づけ、また科挙を就職システムとしていかに位置づけるか、などの問題については、今後の課題としたい。

9 近代中国において外資系企業のなかでも、とくに欧米資本のものをこう呼んだ。

10 現代の就職において、たとえば「コミュニケーション能力」のような曖昧な基準が採用されていることの問題点については、本田由紀が指摘している(『多元化する「能力」と日本社会——ハイパー・メリトクラシー化のなかで』NTT出版、二〇〇五等)。ただし、かといって、試験の点数などの「曖昧ではない、ハッキリした基準」で評価すべきかどうかは、議論の分かれるところであろう。「人が人を評価する」ことに必然的に付随する問題といえようが、あまりに問題が大きすぎるので、別稿に譲る。

11 現代の中国において、肉体労働者は「民工」もしくは「農民工」と呼ばれる。おもに農村からの出稼ぎ者からなる民工は、戸籍や子女の教育など、さまざまなハンディを抱えており、中国社会の大きな問題となっている。民工を扱った研究は中国内外で多数あるが、日本語で読める代表的なものとして、厳善平『農村から都市へ——一億三千万人の農民大移動』(岩波書店、二〇〇九)、秦堯禹『大地の慟哭——中国民工調査』(田中忠仁等訳、PHIP研究所、二〇〇七)を挙げておく。

12 中国において、「学歴の重要性」を謳いながらもそれが役に立たない皮肉を描いた映画に、『盲山』（監督：李楊、二〇〇七）がある。この映画は、騙されて農村に嫁として売られてきた大卒女性が数年後に解放されるまでを描いた、実話を元にした映画である。映画の中で、女性は農村の子どもたちに読み書きを教え、「勉強の大切さ」を繰り返し説くのだが、（勉強をして大学を卒業したはずの）この女性が、「甘い話についてきてしまった単純な女性」というキャラクターとして描かれており、製作側の意図的なものかどうかは不明だが、大きな皮肉となっている。

13 たとえば、石渡嶺司『就活のしきたり』（PHP研究所、二〇一〇）は、就活のハウツーを一問一答で著したものだが、「就職に際し、親が知り合いを紹介してやる、といっているが、コネを使うように気がひける」という「悩み」に対し、「それぐらいなら、コネにならないのでは？」と回答している。「コネの何が悪いの？」ではないのである。もちろん、就職ハウツー本にも、「コネの何が悪いの？」というスタンスのものも存在する。平野稔『あなたが就職試験に受からない理由』（祥伝社新書、二〇一一）等。

14 李敏『中国高等教育の拡大と大卒者就職難問題——背景の社会的学的検討』（広島大学出版会、二〇一一）、一五七頁。

15 今年（二〇一一年）、山西省長治市の職員採用試験で、トップの成績であった男性が「血液中のヘモグロビンの値が悪い」ということで不採用になり、代わって二位だった人物（父親は市内のある地区の幹部、叔父は市内中学校の校長）が繰り上げ

採用になった。しかし、男性が病院で独自に血液検査を受けると、問題なしとの検査結果が出された。このニュースが『中国青年報』で報道されると、大きな反響を呼び、結果男性は採用となり、市の採用担当者数名に免職などの処分が下されたという。『中国青年報』ウェブ版二〇一一年十一月九日、二十一日参照（最終閲覧日、十一月三十日）。

（たかはし・しゅん 本学准教授）